

# 奄美視察報告書

2017年12月14日（木）～15日（金）



沖縄経済同友会

主催：環境・農業・エネルギー委員会

（共催：観光委員会）

# 奄美視察関係資料 目次

## 目次

I. 視察団名簿	・・・	P2
II. 視察スケジュール	・・・	P3
III. 奄美全体地図及び趣旨	・・・	P4
IV. 奄美について	・・・	P5
V. 奄美・沖縄経済交流会	・・・	P7
VI. 金作原について（エコツアー視察先）	・・・	P9
VII. 奄美の郷土料理「鶏飯（けいはん）」について	・・・	P11

## I. 視察団名簿

No.	当会役職	氏名	シメイ	企業名	企業役職
1	代表幹事	玉城 義昭	タマキ ヨシアキ	(株)沖縄銀行	代表取締役頭取
2	環境・農業・エネルギー委員長	外間 晃	ホカマ アキラ	(株)アレックス	代表取締役会長
3	観光委員長	前谷 哲郎	マエタニ テツオ	全日本空輸(株)	企画室企画部担当部長
4	常任幹事	有村 昌造	アリムラ ショウゾウ	琉球サンロイヤルホテル(株)	代表取締役社長
5		上野 高	ウエノ タカシ	(株)商工組合中央金庫那覇支店	支店長
6		太田 武之	オオタ タケユキ	南西石油(株)	代表取締役社長
7		宜保 諭	キボウ サトシ	(株)琉球銀行	常務取締役
8	常任幹事	花牟礼 真一	ハナムレ シンイチ	三井物産(株)那覇支店	支店長
9		松本 真一	マツモト シンイチ	(株)金秀本社	代表取締役社長
10	常任幹事	渡部 勝磨	ワタナベ カツマ	日本航空(株)那覇支店	支店長
11		大門 貴司	ダイモン タカシ	沖縄経済同友会	事務局長
12		友利 龍郎	トモリ リュウロウ	沖縄経済同友会	事務局員

## Ⅱ.視察スケジュール【12/14（木） ～ 12/15（金）】

### 【12月14日（木）】

- |             |   |
|-------------|---|
| 11：30       | 那覇空港集合  |
| 12：40～13：45 | 那覇発－奄美着   |
| 15：00       | ホテルウエストコート奄美（宿泊ホテル）着                                    |
| 15：00～15：30 | 奄美観光ホテルへ移動（宿泊ホテルより徒歩3分）                                 |
| 15：30～17：20 | 平成29年度奄美・沖縄経済交流事業：NIAC主催<br>（外間晃 環境・農業・エネルギー委員長による講演あり） |
| 17：30～19：30 | 交流・懇親会  |

### 【12月15日（金）】

- |             |                      |
|-------------|----------------------|
| 8：20        | ホテルロビー集合             |
| 8：30        | ホテルウエストコート奄美発        |
| 9：10～10：40  | 金作原エコツアー（エコガイド付き）    |
| 12：00～13：00 | ばしゃ山村にて昼食（郷土料理 鶏飯定食） |
| 13：10       | 奄美空港着                |
| 14：10～15：20 | 奄美発－那覇着              |

### Ⅲ.奄美全体地図

沖縄経済同友会  
2017/12/14(木) ~ 15(金)

### 視察行程地図



### 趣旨

環境・農業・エネルギー委員会では「奄美・琉球世界自然遺産登録」への調査・研究を進めており、今回の交流会にて奄美の方々との幅広い意見交換等を行う。また、エコツアー体験を通し奄美の世界自然遺産登録への取組について調査を行う。

## IV.奄美について

### 1.概要

奄美大島は九州から南へ約 380 km 離れており、九州と沖縄本島のほぼ中間に位置している。奄美群島（奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島）の中心的な島で、奄美大島には 1 市 2 町 2 村があり、面積は 712 平方キロメートル、国内の離島では有数の面積・人口（約 62,000 人）の島。

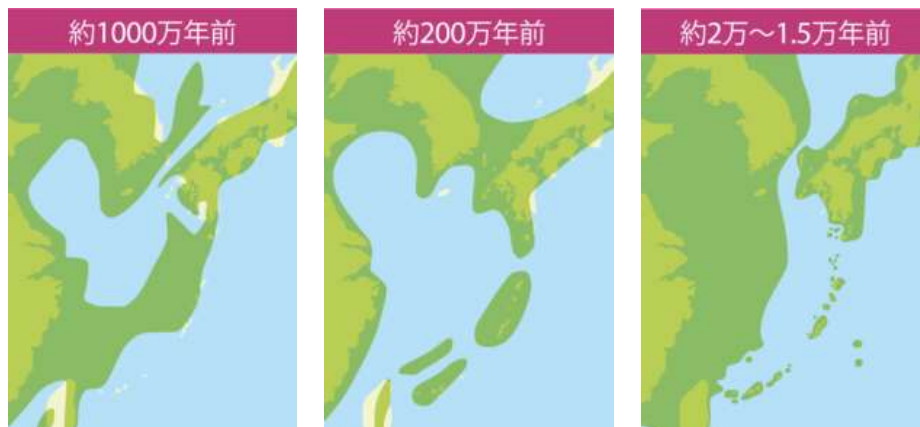
※沖縄県内の本島を除く離島で面積最大は西表島の 289 平方キロメートル、人口最大は石垣島の約 47,000 人。

(参考図：奄美大島との大きさ比較 Googlemap より作成)



奄美群島を含む琉球列島は、後期中新世（約 1,000 万年前）以降の激しい地殻変動により、大陸や日本本土と陸続きになったり離れたりを繰り返してきた。その時々には様々な生き物たちが琉球列島に渡ってきた。そして島々に閉じ込められた生き物たちは、何万年もの長い年月をかけ島ごとに固有な種へと進化していった。

(下記画像および紹介文は環境省 HP より引用)



奄美大島の北部は山の少ないなだらかな地形で、海岸線には美しい砂浜が広がり、毎年たくさんのウミガメが産卵に訪れる。島の中南部の大半は山岳で占められ、世界の亜熱帯域の中でも限られた地域のみ成立する原生的な亜熱帯多雨林が広がっている（今回視察する金作原など）。琉球諸島では最高峰の湯湾岳（宇検村・標高 694m）も南部にある。水の豊富な島（年間降水量 3,000mm）で植物の生育に適しており、原生林は生命のゆりかごとしても機能している。

## 2.奄美の歴史

### ○原始 ～ 9世紀頃 「奄美世」

階級社会以前の共同体（マキヨ）の時代

### ○9世紀頃 ～ 14世紀頃 「按司世」

按司という首長たちの支配割拠する階級社会の時代

### ○1440年頃 ～ 1609年 「那覇世」(琉球王朝統治時代)

奄美大島は1440年前後、喜界島は1464年、徳之島以南はそれ以前に琉球王朝の支配下に入った。琉球王国が奄美群島を制圧できた要因として、室町幕府の全国支配体制の弱体化が挙げられる。日本本土は群雄割拠と戦乱の時代に向かっており、京都や関東はおろか九州からも離れた奄美群島への関心は徐々に失われていった。その隙を狙い、琉球王国は勢力の拡大に成功した。例外的に、琉球王国や奄美大島の「隣国」にあたる薩摩と大隅の守護を務める島津氏だけが、交易などを通じて奄美群島への関心を持ち続けた。

### ○1609年 ～ 1871年(明治4年) 「大和世」

島津氏の琉球侵攻の結果、奄美群島は琉球から分割されて薩摩藩直属となった。砂糖が非常に重要な意義をもち、ことに1745年(延享2年)の「換糖上納」(米で納める税を黒糖に換算して納めること)決定以後はさとうきびが主作の地位につき、奄美の社会に重大な影響を与えた。

### ○明治4年(廃藩置県) ～ 昭和20年(戦前)

廃藩置県によって鹿児島県が設置された。明治12年4月の太政官通達により大隅国に編入、大島郡が設置され、正式に日本の領域となる。

### ○昭和21年1月29日 ～ 昭和28年12月25日 「アメリカ世」

連合軍最高司令部の覚書により本土と行政分離。米国民政府の命令により本土出身者が公職から追放、本土に強制送還となった。空席となった役職には地元出身者が就任し、10月3日に臨時北部南西諸島政庁が成立した。

### ○昭和28年12月25日 ～ 現在

「奄美群島に関する日本国とアメリカ合衆国との間の協定」(条約第33号)により奄美群島が本土に復帰。クリスマスであったことから、米国は「日本へのクリスマスプレゼント」として返還を発表した。

※沖縄の本土復帰は昭和47年5月15日。

## V.奄美・沖縄経済交流会

### 1.基調講演

①講師：外間 晃氏（環境・農業・エネルギー委員会委員長）

演題：「出版書『おきりぞ』から沖縄を紹介」

#### 【講演概要】

○やんばるの別荘を改装し、「やんばるロハス」という宿泊施設を作った。利用者はヨーロッパの方が多し。彼らはロングステイをしてくれる傾向にあり、最高では24連泊した人もいる。今後はヨーロッパの方々の取り込みについてもっと真剣に考えるべきである。



- 沖縄では様々な事業が動き始めている。ハワイの有名ホテルのハレクラニが2019年に沖縄で開業予定であり、沖縄がリゾート地として認められるきっかけになると思う。
- アジアナンバー1リゾート地のバリ島が、リゾートとして発展したのは「ストロングカルチャー」があったからだ、バリの有識者が教えてくれた。沖縄がアジアナンバー1のリゾート地になる為には、琉球文化の掘り起こしと発信が必要ではないか。
- 奄美と沖縄との連携として、富裕層向けに少人数でも高級な船で東シナ海クルーズ（世界自然遺産クルーズ）を行うのも面白い。また、一緒にDMO（観光振興組織）を作ることで世界自然遺産をアピールできるのではないか。
- 沖縄では、これまで「海」と「空」ばかり注目されてきたが、世界自然遺産として初めて「森」が注目されてきた。こういった自然遺産は、将来の宝になるので沖縄全体として盛り上がっていきたいところであるが、現状は那覇の関心が薄いという課題がある。

②講師：松井 輝美氏（南海日日新聞社 専務取締役編集局長）

演題：「県」から「圏」への視点

- 両地域の交流には、境界を超えて圏域の視点が必要である。そうすることで、交流人口と関係人口に圏域人口を加えた活性化策を行うことができる。
- 奄美・琉球の自然遺産が実現すると、鹿児島県下の自然遺産は3島だが、琉球圏で見れば4島になる。更に、屋久島までつなげることで多様性が増す。
- 「県」を超えた「圏」の動きとして、「今帰仁城址」の関連遺産として沖縄の文化が色濃く残る「与論城」と「沖永良部島世之主の墓」をグスク関連遺産として世界文化遺産へ追加登録する流れが起こって欲しい。



## 2.懇親会

参加者 奄美大島商工会議所他経済界：34名

沖縄経済同友会：12名 南西地域産業活性化センター：6名

講演会終了後は、奄美経済界の皆様との懇親会が開催された。奄美では「乾杯条例」があり、黒糖焼酎での乾杯が推奨されている。黒糖焼酎を片手に行われた玉城代表幹事の「うちな一口」乾杯の挨拶で大いに盛り上がり、懇親会がスタートした。途中、近年奄美で行われているテーブルスピーチにて当会メンバーが指名され挨拶する場面もあり、奄美の皆様との懇親を多いに深めることが出来た。最後には、参加者全員で「六調」を踊り、会場全体での盛り上がりはピークに。奄美大島商工会議所副会頭の有村修一様による閉会の挨拶では、奄美と沖縄が今後も右肩上がりに発展するようにと願いを込めた「右肩上げ締め」にて、盛会のうちに終了した。



(乾杯挨拶 玉城代表幹事)



(テーブルスピーチ① 花牟礼様)



(テーブルスピーチ② 渡部様)



(テーブルスピーチ③ 前谷様)



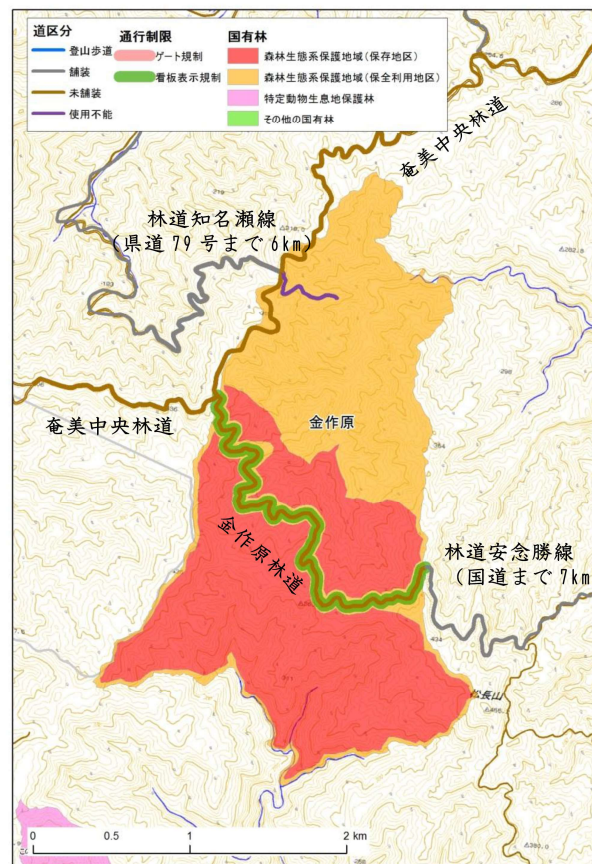
(六調踊り & 右肩上げ締め)



## VI.金作原について（エコツアー視察先）

（林野庁及び奄美市 HP より作成）

林道・歩道	中央部を東西に金作原林道が通っている。また、知名瀬線と奄美中央林道の分岐地点に保護林に伸びるかつての作業道があり、徒歩での利用がわずかながらある。
アクセス	知名瀬線からと安念勝線からの2つのルートがある
利用状況	奄美群島森林生態系保護地位金中では最も利用が多い箇所。ヒカゲヘゴ群落、オキナワウラジオガシの巨木等の観察ツアーとしての観光利用がある。
管理状況	国有林が管理。金作原林道の両端に、一般車両通行規制の看板が設置され、車両の入り込みが規制されている。
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知名瀬線からの観光バスの入り込みがあり、一般車両、レンタカーとのすれ違い時にリスクがある。</li> <li>・トイレ等の設置も検討されている。</li> <li>・オーバーユースは現時点ではそこまで問題化していないが、今後観光客が増加した場合に応じた対応が必要。</li> <li>・通行制限の看板が林道の両端にしかないため、観光客は金作原に到着して初めて制限を知る状況にある。県道からの登り口やガイドマップ等での周知が課題となっている。</li> </ul>



### 1.概要

奄美市名瀬に最も近い奄美の代表的な亜熱帯広葉樹の原生林で、中央には金作原林道 3,800m（昭和45年新設）が貫通している。ここは、奄美の中でも天然林が半分も残っていることで有名。イタジイ、イジュ等は樹齢100年を越す。老年の樹林内には奄美固有の植物や、わが国初発見の植物なども見られる。また、国指定天然記念物のルリカケス、アカヒゲ、オオストン、オオアカゲラ、アマミノクロウサギ、ケナガネズミアマミヤギシギ等固有種の鳥類、動植物類が生息している。大川ダムの上流に位置し奄美市名瀬の水源として重要な地域である、全域が水源かん養保安林と一部保健保安林に指定。

## 2.エコツアー視察



(現地ガイドの安田様より、動植物の説明を聞く参加者)

- 風が強い海側には「風衝低木林（低い気が密集しているイメージ）」が多い。低く密集した森は、湿度が保たれることから水が豊かであり、生物多様性も保たれる。また、広葉樹の多い森でドングリが豊富にある。こういった所も生物にとっては良い環境である。
- 奄美にはハブが多く生息。ハブは生態系の頂点であると共に、奄美の森を守ってきた存在でもある。奄美の人が山の幸をほとんど食べない（山に出入りする機会が少ない）のは、ハブを恐れてきたから。そういった歴史もあり、開発から守られてきた。
- 奄美のマングース対策は沖縄より進んでいるが、ノネコ対策は沖縄が進んでおり、お互いに連携することで効果が高くなると思う。こういった事例に限らず、ガイドがそれぞれの地域を実際に行くなどし、交流の中でお互いを高め合っていく事も重要。
- 奄美（市）と沖縄（県）が連携するとしても、行政の規模が全然違うので上手く進まないこともあると思う。まずは、民間がしっかり連携して行政に連携に繋げていくのが良いのではないかな。



(ゴジラの撮影場所にもなった木々が生い茂る金作原の原生林)

## VII.奄美郷土料理「鶏飯（けいはん）」について

(Wikipedia 参照)

### 1.鶏飯（けいはん）とは

○鹿児島県奄美群島で作られる郷土料理。日本各地に郷土料理として存在する「とりめし」と同字異音であるため混同されやすいが、「とりめし」が丼物や炊き込みご飯の形式に近いのに対し、当料理はだし茶漬に近い食べ物である。

### 2.歴史

○奄美大島の鶏飯は、もともと旧笠利町周辺（奄美大島北東部）にかつて存在した郷土料理で、当時はヤマシギやシロハラなどの野鳥を使用していた（諸説あり）。

○現在のスタイルの鶏飯は、奄美市笠利町赤木名で1945年に創業した「旅館みなとや」が、開業に際して江戸時代にあった鶏肉の炊き込みご飯にアレンジを加えて供するようになったのが始まりとされる。1968年4月に皇太子明仁親王、美智子妃殿下（当時）が奄美大島に来島した際に「旅館みなとや」で食したが、その美味しさに「今一度」とおっしゃり、おかわりをしたという。その様子が伝えられると地元で観光客の人気を博し、奄美大島を代表する郷土料理となった。

○鹿児島県内では給食のメニューとしても定番で、人気をカレーライスと二分し、2005年には1番人気に選ばれたこともある。



(昼食予定先の「ばしゃ山村」ではオーシャンビューでの鶏飯を楽しみました)

## VIII.まとめ

今回の奄美大島の視察を通して、改めて奄美と沖縄は、文化・気候等において共通点があり、更なる連携及び交流の必要性を強く感じた。今回は日程の都合上、奄美大島北部を中心とした視察であったが、奄美の魅力は南部にも非常に多いようであり、沖縄が参考にするべき点はまだまだ溢れていると感じた。最後に、今回視察にご協力いただいた奄美航空ツーリスト様、エコガイドの安田裕三様、交流会に参加された奄美経済界の皆様にはこの場を借りて御礼申し上げます。